

光芒六十年 寺畑喜朔先生への挽歌

正橋 剛二

初めて先生にお目にかかったのは私が医学部一年、昭和二十五年夏の山小屋天狗山荘ではなかったでしょうか、先生は学部四年の夏休みを山小屋診療の傍、山行を楽しんでおられました。

この出会いはやがて戦争中から途絶えていた山岳部の復活につながり、さらにその後の無料奉仕診療を立山一帯の山小屋に繰広げることになりました。昭和二十七年夏のことでした。さらに二年後、立山地獄谷のド真中に金大立山山岳診療所の建物が実現し、これも寺畑先生の才覚という外はなく、先生はさらにそこへ当時の戸田正三学長を始め、医学部長、附属病院長など次々と案内され、遂に診療室には「仁者乐山」（戸田学長揮毫）の扁額が掲げられることになりました。

その後、立山には文部省の登山研修所ができ、富山県警には山岳警備隊が発足、さらに環境庁ができ、公共の活動が増強されて来ましたが、この山岳診療活動は使命を終えることにはならず、逆に現場へ急行できる医師グループとして頼りにされる結果となり、さらにはわが山岳会の水腰英隆会員の構想から、粘り強くかつ強力な活動により、彼の勤務する富山市民病院の改築に際し、屋上にヘリポートが実現し、山岳警備隊の救助活動の救命率を飛躍的に向上させることにつながっています。

これらはすべて寺畑先生が種子を撒き、水をやって育てられた結果といえます。水腰会員は結婚の仲人が寺畑先生であり、しかもその子息水腰英四郎君は今やこの金大山岳診療活動の中枢を担っていて甚だ心強い次第であります。

昭和五十年代、福井医科大学が発足し、初代学長に就任された高瀬武平先生が御持論の「百の銅像より一頁の記述を」の御提唱のもとに北陸医史学会（当初は「医史学同好会」）が発足した時、



寺畑喜朔先生

寺畑先生からお誘いを受けて私は発起人会から参加させて頂きました。以後この学会も、三十七年間に機関誌三十八冊を発行し、ほぼ三百タイトル、総計三千頁に及ぶ論説等を掲載して来ましたが、寺畑先生には毎回演題はもちろん、投稿も頂き、会の活動を強力に支えて頂きました。

先生の果敢な活動の基盤には周到な準備を秘めておいででした。御他界直後、訃報の電話を御子息様より頂き、取急ぎ伏木の御宅へ駆けつけ嘆佛偈一卷読経させて頂きましたが、これらはすべて佛壇の引き出しにあった指示書通りだったのでした。拝見しますとワープロで二枚、通夜、葬儀関係、僧侶の手配などすべて覚え書きとして指示され、御自分の戒名ほか遺影用の写真に至るまで準

備されており、骨拾い、香典返し、遺骨の取扱いから四十九日、納骨に至るまですべて指示されていたのは全く驚きでした。

平成二十年四月、先生の驥尾に付して念願のコス島を巡礼できましたが（「北陸医史」三十一号参照）帰途、イズミールでの夜半、先生は突如吐血され、すぐイズミール大学の救急外来へ行ったわけですが、この時の先生の自己決定力というか、信念を曲げない毅然たる姿勢に大変敬服いたしました。

平成六年五月、『生きがいの源泉一翠巒堂自省録』（三〇九頁）を自家本として出版されました。新聞各社、各機関誌等から依頼された投稿文の集大成ですが、序文によれば約四十年間のもの、生

前自ら編集された遺稿集のお心算のように思えます。

一方、金大医学部同窓会報には「医学部百五十年史のための覚え書」を連載され三十四回まで続き、将来に備えておられることが判ります。また平成十六年には先生御自身の医学関連絵はがきコレクション（約千枚）をもとに『絵葉書で迎える日本近代医学史』（二四五頁、思文閣出版）という大変ユニークで珍しい大型の本を発行されていますが、全く、先生ならではの賜物かと思われま

す。今や幽明境を異にしましたが、謹んで先生の御冥福をお祈り申し上げます。いずれまた遠からず再会できる日もあるような気がいたしております。合掌